



TITLE:

第19回岐阜外科集談会

AUTHOR(S):

CITATION:

第19回岐阜外科集談会. 日本外科宝函 1962, 31(5): 799-801

ISSUE DATE:

1962-09-01

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/205468>

RIGHT:

第 19 回 岐 阜 外 科 集 談 会

昭和37年 5 月 9 日 岐阜医大 C 講堂

1) 上腕骨外顆骨折の治療経験

岐阜医大 整形

丹 羽 昭 右

我々は昭和31年以後36年迄の6年間に、当科外来を訪れた外顆骨折、42名の内16名につき遠隔成績を調査した。これ等16名の内、手術を行ったものは9例であり、その大部分はキルシュネル鋼線固定を行い成績は満足すべきものであつたが、保存的療法を行った残りの7例は殆んど陳旧例であり、肘関節機能は非常に障害され、わずかに新鮮例1名のみは全く機能障害を残さず治癒している。

以上16名の経験より、本骨折に於ては、わずかの転位であればクラーメル副子固定を行うだけで充分であるが、転位の著明なるものや亀裂の中の広いものは、観血的整復を行った方がその機能的予後は良いものである。

2) 胆石によるイレウスの一例

岐大第一外科

広 瀬 光 男

患者は46才の主婦、半年前胆管炎の既往症あり。37年1月4日胸内苦悶、嘔気、嘔吐、腹痛などあり、某医により治療を受け軽快、1月30日突然再び胸内苦悶あり翌朝より頻回の嘔吐、腹痛あり、2月6日イレウスの疑いにて入院す。

入院時腹部は全般に膨隆し、下腹部には軽度の圧痛あり、ここに金属性腸雑音あり、レ線所見では立位単純にて上腹部にガス像多く、恥骨上部に於て円形のうすい結石様陰影あり、造影剤内服により十二指腸球部外側に憩室様陰影あり、小腸は中等度に拡張し、排出おそく、24時間後でも大腸に達せず。

手術所見：胆嚢十二指腸瘻を形成し、ここにより腸内に排出された4.0×3.2×3.0cmの胆石が廻盲弁より約40cm口側に嵌頓していた。尚胆嚢内には小結石1ヶあり、共にコレステリンビリビン石灰石であつた。

3) 先天性腸閉塞症手術成功例

羽島病院外科

河村雄一・浅井紀雄・伴 敏英

出生時2kgの女児(9ヶ月の早産)、産後3日目に頻回の嘔吐を主訴として入院。レ線検査の結果、小腸上部の閉塞と診断。直ちに酸素吸入を行いながら局所麻酔の下に開腹術を施行した所、Treitz 靱帯から約10cm肛門側の空腸に膜状閉塞の存在を認めた。腸壁切開、膜状物切除を行った。術後保育器に収容。小児科医と連絡して補液、輸血を行い、更にクロマイを投与した。手術の翌日から腸雑音聴取し、浣腸により排便を認めた。嘔吐は術後3日目から減少したので経口栄養を行った。術後10日目及び16日目に発熱あり解熱剤、テラマイシン使用により解熱した。

術後25日目一般状態良好となり両親の希望により退院。退院後も簡易保育器に収容していたが、退院後6日目、生後34日目に死亡した一症例を報告した。

4) 9才女児の胃潰瘍の一治験例

岐医大 第二外科

渡 辺 尚

幼小児に於ける消化性潰瘍は、比較的稀なものとされているが、漠然とした腹痛や反復して発来する不定の消化器症状のある時は、一応疑つて精密なレ線検査等を行う必要のあるものである。乳幼児では、穿孔、出血等の急性型が多く、年長児には慢性腹痛、狭穿等の慢性型で来る事が多い。

吾々は最近心窩部の空腹痛、悪心、嘔吐を来していた9才女児に、慢性胃潰瘍を認め、胃切除術を行い全治せしめた症例を経験したので報告し、若干の文献的考察を試みた。

5) 胃癌転移より腹腔内大出血を来した一例

岐医大 第二外科

山 田 藤 吉

症例：48才、男子

9ヶ月前、当科にて胃癌の診断のもとに、手術を施行した。その際の手術所見は主腫瘍腺癌の他に肝転移はみられなかつたが、腹腔内リンパ腺転移を認め根治性は望めなかつたが、胃切除術を施行した。その後無症状に経過していたが、術後6ヶ月より上腹部鈍痛。

膨満感を来し再入院した。入院時肝転移を思わしめる鵝卵大の腫瘤を右季肋部にふれた。その後対症療法中、急に腹部膨隆が強くなり、腹水穿刺により純血性の腹水を得た。直ちにショック状態となり不幸な転帰をとつた。剖検は出来なつたが、転移性肝癌の破綻による腹腔内大出血死と考えられた。

6) 慢性非特異性炎症性唾液腺腫瘍

岐阜医大第一外科

伊東達次・今尾恒裕

50才男子。主訴は嚥下困難及び左顎下部腫瘍。14才の時耳下腺炎に罹患後左頬部から下顎部に直径約10cmの無痛性腫瘍を生じた。約3年前より少し増大し最近時々悪臭あり粘液を排出するようになった。現在児頭大となる。手術により剔出、組織学的所見は唾液腺の実質は高度に萎縮消失、著明な間質結合組織の増殖を認め更に各所にリンパ球の強い細胞浸潤が見られ輸尿管拡張並びに増殖をみる。これらは典型的唾石症の所見である。3週間で全治。

当教室に於ける最近10年間の10例を基に松代氏らの87例の統計的観察と比較し若干の考察を加えた。

7) Hürthle cell adenoma の一例

岐阜医大第一外科

柴田正敏

50才寡婦。単純性甲状腺腫の診断で摘出術を施行、組織学的に Hürthle cell adenoma であつた一例を報告した。

約半年前より前頸部腫瘍に気付き、徐々に増大したが、甲状腺中毒症状はない。B.M.R.-17%, I¹³¹ 摂取率、73.5%であつた。

組織学的には所謂 Hürthle 氏細胞が見られ、核は濃縮性のものが多く、濾胞形成の明かな部分と充実性に増殖した部分があり、濾胞腫は小さいものが多いが中には、かなり巨大な濾胞もあり、稀薄なコロイドを含んでいる。

Hürthle 氏細胞には大小不同があるが、核分裂像及び浸潤性増殖の傾向はない。間質結合組織はやや増殖し、かなり著明な、小円形細胞、ないしは、リンパ球浸潤をみる。

8) Peutz-Jeghers 症候群の一例

岐阜医大第二外科

山村喬

山内胃腸病院

加藤春

症例：26才女子。10年前より腸重積症、腸閉塞症にて6回の開腹術を受けているが、その後も時折悪心、嘔吐、上腹部痛があり来院した。口唇、口腔粘膜、掌蹠に大小多数の褐色色素斑があつた。胃腸X線検査にて、幽門狭窄像と十二指腸以下結腸に至るまで多数の大小不同の円形中心性陰影欠損があつた。開腹により胃潰瘍性幽門狭窄と小腸結腸全般に散在する母指頭大より小豆大の有茎及び無茎 polyp を確認した。polyp は組織学的には、正常粘膜の増殖像で悪性化の所見はなつた。本例では母も口唇に異常色素沈着があり開腹術を受けている。

定型的な Peutz-Jeghers 症候群で胃潰瘍を併発した一例を経験したので報告した。

9) 広筋膜より発生した Fibroma ossificans の一例

羽島病院外科

河村雄一・浅井紀雄・伴敏英

満70才の老婦人。約3.4年前より右腸骨後前上棘部皮下に無痛性、可動性の腫瘍あり、漸次増大の傾向があるので手術を施行し、42mm×28mm×25mmの不正形で灰白色を呈し、表面凹凸、骨様硬、X光線の透過度の低い腫瘍を剔出す。尚腫瘍は既存の骨膜、或いは骨細胞とは無関係で、組織学的に広筋膜より発生した異所性骨発生であり、Fibroma ossificans と診断された。術後約2ヶ月を経過せる現在何等病変を認めない。

10) ゼミノームの一例

岐阜市民病院外科

米谷 洙・安江幸洋

74才の男子。約10ヶ月前右睾丸の無痛性腫脹に気がついたが放置していた所、漸次増大して手拳大になつたので来院した。

来院時には右睾丸は手拳大の腫瘍として触知し、弾性硬、表面稍不整、陰囊皮膚と一部癒着し、左睾丸及精系は正常である。右鼠径部には小豆大の淋巴腺腫脹数個に触れ、弾性稍硬である。腹部には後腹膜性の腫瘍を触知せず。腰麻の下に右鼠径淋巴清掃及び右除辜術を施行した。

剔出標本は9.5×8×7cm、表面稍不整、剖面は肉色を帯び灰灰白色で、組織学的にゼミノームと胎生癌の所見が混在している。

術後コバルト照射を行っていたが、第18日に事故退院した。

尚いささか文献的考察を試みた。

11) 尿道外傷と外傷性尿道狭窄の症例

岐阜医大泌尿器科

後藤 薫・篠田 孝

尾関信彦・阿部貞夫

教室に於る昭和31年から昭和37年4月迄の6年4カ月間の尿道外傷及び外傷性尿道狭窄の症例について観察した。尿道狭窄は144例で、このうち外傷性狭窄は48例であつた。6年4カ月間の外来総数に対するそれぞれの百分率は尿道狭窄全体として1.33%、外傷性は0.46%であつた。骨盤骨折を伴つたものは9例で全て交通事故によるものであつた。狭窄部位は膜様部が75%で最も多い。受傷より初診迄は1カ月以内16.2%、6カ月以内43.2%、1年以内になると51.3%に達する。治療は観血的療法8例、非観血的療法40例である。尿路損傷に対する一般外科医の泌尿器科処置は万全であるとはいえない現況である。手術的処置もさることながら、その予後の管理に充分注意を払うべき事を痛感する。

12) Renacidin の使用経験

岐阜医大泌尿器科教室

後藤 薫・篠田 孝

尾関信彦・阿部 貞夫

磯貝和俊・木村泰治郎

岐阜県立病院皮膚泌尿器科

石山勝蔵・足立 一郎

1) 主成分が磷酸塩、尿酸塩、蔞酸塩である摘除結石の夫々に in vitro で、Renacidin の5%、10%及び20%溶液を作用させた処、磷酸塩に最も優れた溶解性を示し、20%溶液では4lの灌流で、3.2gの磷酸結石が全く崩壊溶解した。

2) 尿道皮膚移植術後の患者の示指頭大2コの腎結石(成分は蔞酸結石)に本剤の10%及び20%溶液を各1週間づつ灌流作用させて、レ線検査で殆んど消失した。憂慮すべき副作用は認めなかつた。

13) 症 例 報 告

イ) 珊瑚樹状腎結石

ロ) 大きな尿管結石の自然排出

県立岐阜病院皮膚泌尿器科

石 山 勝 蔵

イ) 49才。農夫。過労後の血尿及び腰痛を訴える。腎切手術を開始したが多数の砂が出て来たので腎摘出術を行つた。珊瑚樹状のものは12.5g、小結石及び腎砂は4276個。5.55g 尿酸塩石であつた。

ロ) 24才。2回の経産婦。左尿管末端部に、レ線フィルム上で10mm×29mmの結石を認め、膀胱鏡的にその一部をみて手術をすすめたが、25日後入院した時にはこの結石はなかつた。患者は排石を自覚しなつたが、自然排出されたものと思われる。

他に32才男子で7mm×12mm×17mmの尿管結石の自然排出例の写真、標本を供覧し、自然排石の限界につき考察した。